

図書だより

No.2

令和2年2月25日号

私のおすすめ本

「からくりピエロ」 40mp著



食品科学科2年 成田 花音

私が紹介する本は「からくりピエロ」というライトノベルです。このノベルの最大の特徴は、からくりピエロという2011年にリリースされたボーカロイド楽曲であるということです。からくりピエロは2011年7月15日に40mpによって作詞・作曲された曲で、失恋ソングであると言われています。ねじを巻く音から始まるこの曲は、基本的に主人公である「僕」が「君」を中心にしてストーリーが進んでいきます。この曲では「君」を待ち続けた「僕」が最後

「君が思うままに操ってよ」

という言葉で終わってしまいますが、ライトノベル版では内容が少し変わっています。

主人公は春から高校生になる美紅です。美紅が凜と共に県立南山高校に元気よく登校するところからスタートします。その途中、美紅は美術の画材を肩にかけた男子とぶつかってしまい、彼の名を知ることができたのは放課後のことです。三年生の飯田にだまされて美術室へとやってきた美紅達は、しぶしぶデッサンを体験することになり、美紅についてのが今朝会った悠人でした。悠人に対する不思議な思いと初めてのデッ

サンを体験し、美紅は凜と一緒に美術部に入ることになり、慣れないデッサンに苦戦しつつも、偶然にも悠人に絵のレッスンをしてもらえるようになりました。そしてそのレッスンの後、悠人に絵のモデルを頼まれた美紅は、そのことを凜に報告し、改めて悠人が好きだと自覚します。ですが、凜から悠人には彼女がいるらしいと聞き、悠人に直接聞いた美紅に悠人は

「・・・いるよ」

と答えました。この言葉にショックを受ける美紅でしたが、休日にたまたま寄ったオルゴール屋で、ピエロの人形がついた悲しい音色のオルゴールを見つけ、そのメロディーが美紅の頭の中にずっと残りました。

悠人の絵のモデルをする当日になり、美紅は悠人への思いをさらに強くします。モデルのお礼として悠人から日曜にご飯に誘われ、行くことになります。彼女がいるはずなのに、と戸惑う美紅でした。食事をし街の夜景を眺め、美紅は悠人に告白します。悠人はごめんという言葉と共に、あと1年待ってくれるよう言いました。悠人の言葉の真意がわからない美紅でした。

ある時、3年生の涼子に悠人に近づくなと言われて傷ついてしまいます。ですがやっぱり悠人の気持ちを知りたくなり、次の日曜日に一方的に悠人と会う約束をします。しかしそのメールに気づいた涼子は悠人がメールを見る前に削除してしまいます。その結果、美紅は5時間以上待ち、それを知った悠人が来た頃にはもう美紅は帰ってしまっていました。その後、悠人は美紅に1年待つてほしいと言った理由である、皆森麗華からの手紙を読み、あの日曜日の美紅と同じように待ち続けました。そのころ美紅は涼子から日曜日のこと、そして悠人の彼女が2年前に亡くなってしまったことを聞きます。美紅は悠人が好きだと再確認し、日曜日のあの時のように悠人を待つ美紅の前に悠人が現れ、二人はお互いの気持ちを伝え合います。月日が流れ、ゼミの講習で待ち合わせに遅れた悠人に

「悠人先輩、まちくたびれましたよ！」

と言って物語が終わります。

私は普段、恋愛ノベルは読まないのですが、自分の好きな曲ということもあり、読んでみることにしました。曲中ではわからなかった部分も理解することができました。この本の他にも曲から小説になったものがたくさんあるので、本を読むきっかけとして、それらの本も読んでみたいと思います。
(裏もあります)

「学年でビリのギャルが1年で偏差値を40上げて慶應大学に現役合格した話」 坪田信貴 著

森林科学科2年 小野 陸登



私は、第49回新風賞を受賞した、坪田信貴さんの「学年でビリのギャルが1年で偏差値を40上げて慶應大学に現役合格した話」という本を読んで、とても感動するお話だと思ったので、この本を紹介することにした。

高校生の時に、ビリギャルと呼ばれていた小林さやかさんが偏差値40も上げて慶應大学に現役合格するという「奇跡」がどのようにして起こったのかが気になり、読み進めていくこととした。

読み進めていくと、まずビリギャルがどんな人なのかが分かってきた。勉強でもスポーツでも全然だめで、どんな先生でもコイツはもう無理だとあきらめていた生徒のビリギャルが特別な先生、坪田先生に出会ったことによって、急速に才能を伸ばしていくことが分かり、どんな人でも何かしらの可能性を持っているということを実感した。さやかさんが坪田先生と出会った後に分かったことは、二人の相性の良さだと思う。

塾での最初の面談で志望校の話になり、東大がダサくて嫌なら慶應にするかと言われて、さやかさんはすぐその気になってしまう。普通の教師だったら、「アホか、こいつ」と思うところだが坪田先生は「すごい可能性を秘めた愛すべきアホだ」と思い、本気で指導する気になっていく。

そんな先生だから「聖徳太子」を「せいとくたこ」と読んで「この子、きつと超デブだったから、こんな名前つけられたんだよ」「超かわいそう」などと言い出しても、怒るでもなく、否定するでもなく「君の発想は天才だ!」とその場で褒め上げ、やる気を出させていく。

そのようなテクニックを使って、坪田先生はさやかさんの底力を引き

出し、学力をどんどん伸ばしていく。私も、坪田先生のような先生に指導していただければ、やる気も出て、しっかり勉強に取り組めるのではないかと、うらやましく思った。

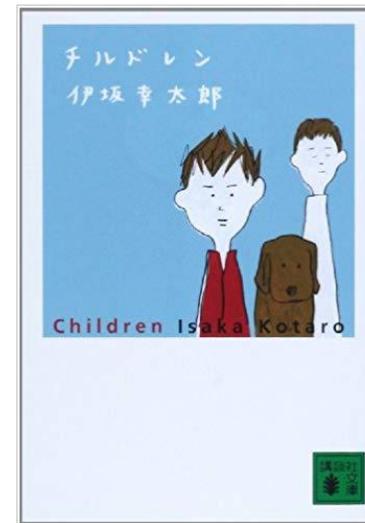
受験までの1年間で目に見えた変化があったという。それは、どの学部を受験するにも付きまってくる科目—英語だ。英語は取り分けさやかさんに特訓したという。だんだんと勉強をしていくにつれて、さやかさんにとって勉強自体が楽しくなってきた。その理由は、例えば英単語の学習などを、塾ではゲーム感覚で楽しめるように教えていたことにあったという。

この本を読んでわかったことは、人それぞれに合った勉強法を見つけることによって、だれにでも伸びる可能性はあるということです。ぜひ、読んでみることをお勧めします。

「チルドレン」

伊坂幸太郎 作

食品科学科1年 山本蒼空



私は、伊坂幸太郎の「チルドレン」を推薦します。この本は、家庭裁判所の調査官である陣内氏、武藤氏と陣内氏の友人の永瀬氏が出てきます。主に十代から二十歳までの少年、少女の事件を担当する、家庭裁判所の二人を軸に話が展開していきます。

この本には、私と年の近い中学生や高校生が罪を犯して調査官の前にやってきます。援助交際を繰り返す女子高校生は、この仕事をして5~6年の武藤氏をだます事くらい簡単だという風に「ちょろいのよ」と言います。また、16歳の男子高校生はマンガ本を万引きして家裁に送致されてきます。「飲食店の代表取締役」なのに、ジャージ姿で息子との面会に訪れた父親。この時にある異変に気付くべきなんです、ついそのまま読み進んでしまう。第二の主役である陣内氏のキャラが際立って面白いから、まじめな武藤氏との違いが際立っていきます。私は、一人ひとり違うからこそ、今と将来のために精一杯頑張りたい、そう思えた本でした。